

収録・解説 酒井董美

語り手 松原あきさんのまま帰られませんでした。
(大正12年生まれ)

平成7年3月13日収録

あらすじ

松江城の殿さんのお嬢さんが、(11歳のある日) 駕籠に乗って大山に詣られて、帰りに赤松の池に寄られました。そして駕籠の中から出て、その池の淵まで行って帰られかけましたが、後帰りをしませんでした。池の中にずいっと入って行かれたの。それからみんなが、大きな声で呼びましたら、10分ほど先に蛇体になって現れました。それで、「もとの身体で出たい。もとの身体になって出てこい」とみんなが大きな声で呼びましたけども、再び池の中に入って、そ

赤松の池の大蛇

(米子市今在家)



イラスト・福本隆男

昔話の「蛇婿入り」と関係

解説

そういうことがあって、わたしたちは11歳の年には、あの赤松の池に

この話は伝説に分類できると、この地方では比較的広く知られている。

鳥根具隠岐の島町では「津井の池の蛇婿」と

一宮さん(水若酢神社の宮司・忌部家の屋号)のお嬢さんが中村へ遊びに出た途中、床山の池の畔で夕立にあった。小屋に入ったところ美青年が

姿が見えなくなったので

行ってはいけない。また、大山詣りはしても、帰りには11歳の年の人は赤松の池に寄らないようにしていました。

先年発行された『米子市史』の中でもこの話は紹介されている。未婚の若い女性が池に沈んで蛇体に化す話は、人びとからは好まれていた。昔話の「蛇婿入り」に関係があるよう

いうかなり規模の大きな物語があるが、スケールが壮大で紹介しきれない(拙著「ふるさとの民話」第3集「隠岐編」・ハーベ

つてしまった。そうしているうちにお嬢さんが両親に向かって「わたしは床山の池に行くと」

「もう一度姿を見せてくれ」と言うと、今度は蛇の姿になって出てきたが、それきりで親子の縁が切れてしまい、しかたなく両親も家に帰ったと本を読んでいたが、あまり

「赤松の池の大蛇」の青年もいた。やはり言葉話では、この隠岐の島町も交わさずお嬢さんは帰ったが、家の中戸口の縁に毎朝濡れた草履がある。毎夜誰かが来るらしいという事になり、床山の方へ向かう道を下男が後をつけてみたが見失